



### 今度は何処へ行こうか

福島県立図書館長 佐藤 義和

数年前に、県立美術館での円山応挙展で、愛くるしい表情の犬の掛け軸や毛の一本一本まで微細に描かれかつ写実的な虎と豹（当時は実物ではなく、毛皮を見て描いており、豹をメスの虎と勘違いして描いた）の屏風などに魅了された。次の展示室に進むと、襖などで囲まれたちょっと広いスペースがあった。周りはずべて応挙の作品だという。しかも応挙寺からの借り物だという。応挙寺？そんな寺がほんとにあるのか、疑問に思い、気になっていたが、しばらく忘れていた。ふと思い出し、図書館で調べてみると、兵庫県にある大乘寺と判明した。早速行ってみた。その寺は、兵庫県の日本海側のあまり大きくない部落の入り口にあり、10m以上もある石垣の上に建ち、外観は屋根も壁も真っ黒で派手さはないが、すごく大きく立派な寺だった。駐車場の前に立って驚いた。寺の前のバス停の名は、なんと応挙寺。通称で応挙寺と呼ばれており、応挙寺は実在していた。なぜ応挙の作品がここにあるのか。それは、貧しい農家に生まれた応挙が、画家を目指して京都で修行を始めた時、京都でこの寺の住職に出会った。住職は、応挙の才能を認め、応挙に修行のためのお金を与えた。そのお金で修行した応挙は、後に、画家として大成し、京都四条に本拠地を置き、多くの弟子をかかえ、四条円山派と呼ばれるまでになった。寺の本堂が建て替えられることを聞きつけた応挙は、寺への恩返しのため、弟子を引き連れて駆けつけ描いたものという。ほとんどが襖絵だが、壁にも大きな襖絵がはめ込まれており、すべての部屋のすべての壁と襖に描かれている。その数なんと165点、全部国の重要文化財、すべて応挙と弟子達の絵、まさに応挙寺だ。最初の広間には、金箔の地に墨で描かれたクジャクと松の図。クジャクの鋭い眼光とフワーとした羽は実にリアルだ。襖を開けると本尊が安置されている。襖を開けても閉めても松の枝が繋がるように工夫されている。照明を消して自然光で見ると、目の錯覚で、クジャクの羽と松の葉が深緑色に見える。これも計算されたものとか。しばらく進むと、上段の間を備えた大広間にでる。殿様が訪れた際に使用された。風景画で、角度により、岩が伸びたり縮んだりしたように見える。上段の間の後ろには武者隠しの部屋がある。勿論そこにも藤の花と鳥の図が。次の部屋には上には竹林、下では子犬達がじゃれ合って遊んでいる。そのころは、竹かんむりに犬、笑である。その中で、こちらを凝視している一匹の犬、左から右に移動しても、ずっとこちらを向いている。人呼んで八方睨みの犬とか。その他、ハケで描いたフワフワ毛の猿やお尻が動く人物画などに埋めつくされていた。応挙が亡くなる1年ほど前の作品で、持てる技を出し尽くした、集大成というべきものであった。いいものを見せてもらったという感じがして、大満足であった。

さあ、今度は、何を調べて、何処に行ってみようか。